病院図書室　15(3):77-79,1995

阪神大震災　その後

ボランティア報告

－本の山と格闘した2日間の記録－

またいい汗流したい

田　中　文　子
（済生会兵庫県病院）

1月17日の兵庫県南部地震より4カ月経った5月27日の土曜日、協議会のボランティアとして社会保険神戸中央病院に行きました。午前中仕事をしての帰り道での参加です。地震後社保神戸には2回行っていましたので、どのような状況かはすでに知っていました。肉体労働でも明日は日曜日と軽い気持ちで参加したのです。

午後2時前に白いドライバー手袋を持って加わりました。すでにペースが乗っている感じで皆さん黙々と作業しておられ、ボランティアの5人と社保の2人がまるで何かにとりつかれたように働いていました。途中の休憩まではその独特な雰囲気の中に入れなかったような気がします。本当に怖いような雰囲気でした。

作業は書架に外国雑誌、国内雑誌別にアルファベット順に並べていくことでした。ＡＢＣ、ＡＢＣとぶつぶつ言いながら通路と書庫を行ったり来たり。白い手袋が汚れる頃には手の疲れが気になりだし、だんだんと無口に。先ほどの皆さんの雰囲気が分かりかけました。しかし、4時半になっても皆手が止まりません。びっくりするパワーでした。

作業後、手の震えを感じながら林さんに聞きました。「何か耐震の工夫をした？」「何にもしていない。前といっしょ」「じゃあ・・・」。

その直後はもうボランティアはこりごりと思っていましたが、日が経つにつれて「あの時のパワーは何だったのか」と懐かしくさえ思えます。そして、また皆でいっしょに汗を流したいと思っています。

すばらしい仲間に乾杯！

前　田　元　也
（西淀病院）

5月27日に社会保険神戸中央病院へ協議会ボランティアとして参加した。当日の作業は、図書室の前の廊下に山積みされている雑誌のバックナンバーを書架にタイトルごとに配架していくこと。至って簡単、それだけのことである。しかし、図書館員の方であればその大変さは身をもって感じていただけることと思う。おそらく当日参加した誰もが、作業を始める前はとても一日では終わらないだろうと確信していたに違いない。それほどの量だった。

作業は洋雑誌チームと和雑誌チームに分かれて進められた。お互いのチームの進行状況を意識しながらの作業である。「洋雑誌チームの方が人が多いじゃない」「洋雑誌の方がタイトル数が多いからですよ」などなど。「Lancetは・・・」と、どこかで声がすると、「はい、ココ！」と連携プレーがいたるところで見られる。時間の経過にしたがって、発せられる言葉が「本ってどうしてこんなに重いんだろうねぇ」「まだこんなに残っている

の！」と変わっていく。しかし、やめようとしないところがプロである。発せられる言葉とは裏腹に作業はどんどん進められ、誰もが無理だと感じていた作業を見事終了させてしまったのである。

終わってみると、今までに感じたことのない心地よい達成感があった。それを感じさせたものはいったい何だったのだろうか。病院の図書館員同士、これまでにいろいろと協力し合い連携してきたが、同じ場所で同じ時間に、それも図書室の仕事で汗を流すという経験はなかった。それが今回こうして体験できたという達成感ではなかっただろうか。

ボランティア活動に参加して自分も図書館員の一員なのだというすばらしさを感じることができた一日であった。これからもそんな仲間の中でがんばっていきたい。

すばらしい仲間に乾杯！

これぞ図書館員
－Powerful and Speedy Workers－

山　崎　捷　子
（淀川キリスト教病院）

初夏、快晴の５月28日（日）、山室さん（京都南）、重富さん（京都市立）、田中さん（国立姫路）、熊井さん（兵庫県立尼崎）、それと前日も他のメンバーと社会保険神戸中央病院にボランティアに出かけた小田中事務局長（国立京都）と私の６名のボランティアはＪＲ灘駅から神戸労災病院図書室へ向かった。

ガランとした書架、廊下にまで山積みされた段ボールを見た時、本当に今日一日で整理できるだろうかと不安であった。さらに、棚番地をつけていない、一つの段ボール箱に同一分類のものが入っていない、ＮＤＣ分類のものをＮＬＭＣ分類にして配架してほしいという説明を聞いた時この不安はさらに強まった。しかし、仕事を始めてみると、みんなが一体となって目的に向かって進み始めた。その仕事ぶりはパワフルで速く、几帳面で、これぞ図書室の担当者という仕事ぶりであった。結局、雑誌を除いた単行本はＮＬＭＣに分類し直され、全集ものはキチンと１巻から巻を追って棚に納まった。

この過激な肉体労働は、なぜか「やった！」という達成感と充実感をもたらし、心も体もさわやかな気持ちにさせた。私にとってこの初めてのボランティアの経験はとても有意義であった。また機会があればボランティアをしたいと思っている。

先輩たちに教えられた一日

熊　井　亜由美
（兵庫県立尼崎病院）

協議会から「被災地の病院図書室へ片づけの応援に行きませんか」とのお誘いがあった。自宅も勤務先の図書室も被害が少なくその日のうちに何とか片づいたので、近くの図書室のひどい状況を知るたびに何かしたい気持ちに駆られていた。しかし、何をしたらよいのか分からず、もやもやした気持ちのまま毎日を過ごしていた。そのような時に、お手伝いできる機会が与えられたことが嬉しく、神戸労災病院の図書整理に参加した。病院図書室に勤務してまだ一年が経っていない私は、ボランティアに行くというよりは、実習をさせてもらいに行くような気分であった。

当日は労災病院の担当者の方と応援の６人の計７人で主に単行本を片づける作業となった。先輩たちは手際がいい、それに大勢だと速い。単行本の整理がＮＤＣ分類をＮＬＭＣ分類に移行しながらの配架となったのだが、山のように積まれていた段ボール箱が次々と片づいていく。まだＮＬＭＣを知らなかった私は、横で全集を並べていくという単純作業に没頭しつつ、先輩たちの談笑しながらの楽しそうな仕事ぶり、そして軽々と本を運んでいく様子を盗み見ながら密かに感動していた。

半日ほどのお手伝いであったが、終わってみると程良い疲れが心地よく、久しぶりの充実感を味わった。しかし、出向いて行った私たちは少しでもお役に立てばという軽い気持

ちだったが、受け入れる側の担当者の方は限られた時間内で、しかも状況を把握しているのが自分一人という中で、効率的な進め方を考えなければならない。事前の準備が大変だったろうと思う。

この日は作業目的がはっきりしていたので、それぞれがスムーズに動けた。ただ、一日でできる量は限られている。全部とは言わないまでもある程度のかたちが整うまでの継続性を考えた方がよいのではないだろうか。

今回のボランティアは充実した一日であったということに加えて、私にとっては他の方と顔見知りになれ、いろいろと参考になるお話が聞けたことが非常に有意義であった。次回が計画されれば、ぜひまた参加したい。

神戸労災病院に心を残しながら

田　中　泉　美
（国立姫路病院）

震災から4ヵ月余りが経過した5月28日（日）、神戸労災病院図書室の整理のためボランティア活動に参加した。メンバーは事務局長の小田中氏をはじめ山室さん、山崎さん、重富さん、熊井さん、そして私の6名である。

ＪＲ灘駅の改札を抜けてまず目に入ったのが、テント生活をする被災者の生活風景であった。目の当たりにするとやはり胸が痛んだ。山の手に向かい坂道を20分ほど歩くと、閑静な住宅街の中に病院は位置していた。

図書室に入ると、真新しい固定書架が並べられ、床には所狭しと書籍の詰め込まれた段ボール箱が重ねられていた。廊下にも箱があふれ出していた。神戸労災病院の井川さんによれば、震災時は書架が折り重なるようにして倒れ、書籍が散乱していたらしい。種分けして箱詰めにするまでにもかなりの労力が費やされたであろうと想像できた。

箱から取り出した単行書を流れ作業で配架し、背表紙が見える状態にした。まずシリーズものを片づけた。額の汗をぬぐいながら、全員がフル回転してがんばった。井川さんよりこの機会にＮＤＣからＮＬＭＣに分類法を変更したいとの要望があった。わがボランティア軍にとっては専門知識の活かしどころである。洋書、和書のグループに分かれ、和気あいあいと作業を進めた。体の疲れを忘れさせる不思議な連帯感が生まれていた。そうして予定の作業は終わった。これからも続くであろう井川さんの苦労を考えると立ち去りがたい思いがしたが、夕方5時頃私たちは病院を後にした。

担当者であれば図書室の移転や書籍の大がかりな移動を経験し、人手の有り難さを知る人は多い。しかし、今回は震災という予期せぬ出来事であっただけに担当者に与えたショックは計り知れない。たった一日であり、ボランティアと言えるほど大それたものではないが、同じ職場で働く者としてこのような活動に参加できたことを感謝したい。